

新潟を歩く

小島隆

今、土と水の芸術祭が開催されています。市内各地で、水と土にちなんだ芸術作品が飾られ、多くの人が訪れています。この催しと併せて、各地域でこれまで気がつかなかった夫々の地域の歴史や見どころを見直そうという運動が進められています。

さて、こうした動きに触発されて、新潟市内の西大畑近辺を歩いてみようと思います。先ずスタートは新潟市の美術館、この建物は建築家の前川國雄の設計です。彼は1906年新潟市で生まれました。丹下健三と並び称せられた建築家で、上野の東京文化会館は彼の設計です。彼の晩年住んだ住居は現在東京の小金井公園の一角に移築され見学することができます。

前川と同じ年に、大神宮と斎藤家夏の別邸の間で（南浜通り）、作家の坂口安吾が生まれます。彼は旧制新潟中学を中途退学して上京しますが、彼が通ったであろう道筋に立つ旧市長公舎について最近、安吾の遺品を展示する“風の館”が出来ました。風の館の坂を登ると旧日銀支店長宅があります。いまは“砂丘館”の名で公開されています。昭和の初めごろの日本建築です。砂丘館の前の段々が“どっぺり坂”、一名落第坂と呼ばれています。

さて、その坂を下りたところに現在は“ネルソン”というレストランになっていますが、旧新潟県副知事公舎があります。応接間だった六角形の洋間と8～10畳敷きの日本間が残っています。ここには、戦後間もなく作家の野坂昭如が住みました。空襲で焼けた神戸を逃れ、その当時新潟県副知事であった父を頼って移り住み、旧制新潟高校に入学します。母親は後妻で新橋の芸者だった人で、彼はその母に連れられて古町で芸者遊びを覚えました。彼の自伝小説“行き暮れて雪”にその模様が綴られています。

副知事公舎をあとにして柁谷小路方面に向かって進み、オギノ通りに入って直ぐ左側に荻野久作宅跡が小さな公園になっていて銅像が建っています。荻野は“荻野式避妊法”で有名ですが、もともとは静岡県豊橋市の出身です。東京の医学校を出たあと、現在も上大川前にある竹山病院に勤めます。オギノ通りをもう少し行くとやはり小さな銅像が建っています。澤田敬義の銅像で岐阜県出身の医者でした。昭和26年この二人と会津八一の3人が新潟名誉市民となりました。そのあと先に名誉市民は無く、今でも新潟市の名誉市民はこの3人に止まっています。会津八一記念館は素通りしてしまいましたが、記念館とならんで、八一が晩年住んだ北方文化博物館分館も見逃せません。

ここまで歩いて、まだまだこの界隈の紹介は尽きません。新潟の町は何も見るところがないとよく言われますが、実際歩いてみると、歴史的な家並みとそこに生きた様々な人々が垣間見え、新潟も案外、味わいの深い、物語りに満ちた“まち”と気づくことができます。皆さんもどうぞ一緒に歩いてみませんか。